

研究発表資料（金井）

①エウセビオス（4世紀）、ロゴスの先在について

καὶ ὅτι γέ ἐστιν οὐσία τις προκόσμιος
ζῶσα καὶ ὑφειστώσα, ἢ τῷ πατρὶ καὶ
θεῷ τῶν ὅλων εἰς τὴν τῶν γεννητῶν
ἀπάντων δημιουργίαν ὑπηρετησαμένη,
λόγος θεοῦ καὶ σοφία χρηματίζουσα,
πρὸς ταῖς τεθειμέναις ἀποδείξεσιν ἔτι
καὶ αὐτῆς ἐξ ἰδίου προσώπου τῆς
σοφίας ἐπακούσαι πάρεστιν, διὰ
Σολομῶνος λευκότατα ὡδέ πως τὰ περὶ
αὐτῆς μυσταγωγούσης¹

「実際、世界の形成される前に、生命をもって実在したある本質があり、その本質は全被造物の生成^{デーミウルギア}で万物の父なる神に仕え、神のロゴスとかソフィアと呼ばれたが、そのことは既述の証拠に加え、ソフィアご自身の人格^{プロソポシ}からも学ぶことができる。なぜならば、ソフィアはある所でソロモーンを介し、ソフィアご自身の秘密をきわめて明快に語っているからである。」

『教会史』1.2.14 秦剛平訳²

②金井、基本的な問題設定

この主題<知恵の人格化>³で扱われる「人格」とはキリスト教思想史の用語であり、概念である。従ってこれはキリスト教思想史に属する課題であり、キリスト論・三位一体論における「人格」(persona, πρόσωπον)概念の形成に関わる問題である。より正確には旧約聖書のテキストを「人格である知恵のことば」と理解した新約聖書(特にパウロと福音書)及び教父の思想の展開を跡づける、旧約解釈史の問題であることを明確にする必要がある。「知恵の人格化」(personification or prosoponification of wisdom)が進行する場所は旧約テキストではなく、初期キリスト教思想なのである。⁴

③エイレナイオス（180年頃？）「神の両手」⁵

Neque enim indigebat horum Deus ad
faciendum quae ipse apud se praefinierat
fieri, quasi ipse suas non haberet manus.
Adest enim ei semper verbum et sapientia,
filius et spiritus, per quos et in quibus
omnia libere et sponte fecit, ad quos et

神は自らのもとの生成を予め定めたものを造るために、あたかも、自分の両手を持たないかのように、これら天使たちを必要としたわけではない。それというのも、彼の側には、いつもことばと知恵 [すなわち] 子と霊がいるからであり、彼はそれらによって、ま

¹ Eusebius, *Ecclesiastical History*. Kirsopp Lake, tr. Loeb Classical Library #153, Harvard UP., 1926, pp.19-20.

² 『教会史』p.20.

³ 発表者による補足。

⁴ 金井「知恵の人格化と一人称表現」、p.16.

⁵ エイレナイオスの原文はすべて Fontes Christiani による。

loquitur, dicens: “Faciamus hominem ad imaginem et similitudinem nostram”, ipse a semetipso substantiam creaturarum et exemplum factorum et figuram in mundo ornamentorum accipiens.

た、それらの内に、自由に、また自立的に万物を造ったのであり、それらに向かって語りかけ、「われわれのかたちに、われわれに似せて人間を造ろう」（創1:26）と言ったのであり、創造されたものの実体と、生じたものの範疇と、世の美しいものの型を自分からとったのである。

〔『異端反駁』4.20.1 鳥巢義文訳〕⁶

Nemo enim alter “poterat neque in caelo, neque in terra, neque sub terra aperire” paternum “librum, neque videre eum”, nisi “agnus qui occisus est” et sanguine suo redemit nos, ab eo Deo qui omnia verbo fecit et sapientia adornavit accipiens omnium potestatem quando “verbum caro factum est”:

なぜなら、「屠られ」、自分の血で私たちを買った「子羊」以外には、万物をみことばによって造り、知恵によって秩序づけた [神] から「みことばが肉 [なる人] となった」時に、万物に対する権を受けて、父の「巻物を開き、それを見ることのできる者は、「天にも地上にも地の下にも、誰もいない」からである。

〔同 4.20.2 小林稔訳〕⁷

Et quoniam verbum, hoc est filius, semper cum patre erat, per multa demonstravimus. Quoniam autem et sapientia, quae est spiritus, erat apud eum ante omnem constitutionem, per Salomonem ait: “Deus sapientia fundavit terram, paravit autem caelum prudentia; sensu eius abyssi eruperunt, nubes autem manaverunt ros.” Et rursus: “Dominus creavit me principium viarum suarum in opera sua, ante saecula fundavit me, in initio antequam terram faceret, priusquam abyssos constitueret, priusquam procederent fontes aquarum, antequam

さて、みことばすなわち子が常に父のもとにいたことは、多くのことで以て [既に] 示したが、知恵すなわち霊も一切の創造より以前から[父の] もとにいたことは、ソロモンを通して [聖書が] 《次のように》⁸言っている。「神は知恵で地を基礎づけ、思慮で天を整えた。その知覚によって深淵は現われ、雲が露を降らせた」（箴言 3:19~20）⁹と。また、「主はそのわざのため、自分の道の初めとして私を創った。世々よりも前に、初めに私を据え、地を造る前、淵を造る前、水の泉が [湧き] 出てくる前、山を据えつける前、すべての丘よりも前に私を生んだ」 [とも言っている] (箴言 8:22~25)。

⁶ 小高『原典 古代キリスト教思想史 1』p.111.

⁷ 小林『エイレナイオス 4 異端反駁IV』pp.70-71.

⁸ アルメニア語訳による補足、訳者による。

⁹ 70 人訳の引用。エイレナイオスが使用した写本については、小林の注を参照。以下同じ。

montes confirmarentur: ante omnes autem colles genuit me.”

[同 4.20.3 小林稔訳] ¹⁰

④「ソロモンの知恵」、知恵と霊

6 fila,nqrwpon ga.r pneu/ma sofi,a kai. ouvk avqw/w,sei bla,sfhmon avpo. ceile,wn auvtou/ o[ti tw/n nefrw/n auvtou/ ma,rtuj o` qeo.j kai. th/j kardi,aj auvtou/ evpi,skopoj avlhqh.j kai. th/j glw,sshj avkousth,j

7 o[ti pneu/ma kuri,ou peplh,rwken th.n oivkoume,nhn kai. to. sune,con ta. pa,nta gnw/sin e;cei fwnh/j

21 o[sa te, evstin krupta. kai. evmfanh/ e;gnwn h` ga.r pa,ntwn tecni/tij evdi,daxe,n me sofi,a

22 e;stin ga.r evn auvth/ pneu/ma noero.n a[lgion monogene,j polumere,j leptu,n euvki,nhton trano,n avmo,luntou safe,j avph,manton fila,gaqon ovxu,

23 avkw,luton euvergetiko,n fila,nqrwpon be,baion avsfale,j avme,rimnon pantodu,namon panepi,skopon kai. dia. pa,ntwn cwrou/n pneuma,twn noerw/n kaqarw/n leptota,twn

17 boulh.n de, sou ti,j e;gnw eiv mh. su. e;dwkaj sofi,an kai. e;pemyaj to. a[gio,n sou pneu/ma avpo. u`yi,stwn

1:6 知恵は人間をいつくしむ霊である。しかし、神を汚すものを赦さない。神は人の思いを知り、心を正しく見抜き、人の言葉をすべて聞いておられる。

1:7 主の霊は全地に満ち、すべてをつかさどり、あらゆる言葉を知っておられる。¹¹

7:21 隠れたことも、あらわなこともわたしは知った。

7:22 万物の制作者、知恵に教えられたからである。知恵には、理知に富む聖なる霊がある。この霊は単一で、多様で、軽妙な霊、活発で、明白で、汚れなく、明確で、害を与えず、善を好む、鋭敏な霊、

7:23 抵抗し難く、善を行い、人間愛に満ち、堅固で、安全で、憂いがなく、すべてを成し遂げ、すべてを見通す霊である。この霊は、ほかの理知的で、純粹で、軽妙なすべての霊に浸透する。

9:17 あなたが知恵をお与えにならなかったなら、天の高みから [あなたの] ¹²聖なる霊を遣わされなかったなら、だれが御旨を知ることができたでしょうか。

⑤テオフィロス（180年代？）「トリアス」と「神の両手」

光るものに先立つ三日は神と、その言^{ロゴス}と、その知恵^{ソフィア}というトリアス (trias [3つ]) を型どったものら (typoi) である。第四の場を占めるのが人間である。人間は光を必要と

¹⁰ 小林、前掲書、p.71.

¹¹ 旧約外典の引用は新共同訳による。

¹² 発表者による補足。

する。こうして、神、言、知恵、人間が〔存在することになる〕。

『アウトリュコスへ送る』2.15 小高毅訳¹³

実に、万物を言によって造られた後、神はそれらのすべてを副次的なものら (parerga) とみなされ、人間の創造をご自分の両手にふさわしい唯一の業と考えられたのである。更に、あたかも助け手が必要であるかのように、神は「我々の像と似姿にかたどって、人間を造ろう」と言っておられるのが見られる。だが、〔神は〕他の何者かによってではなく、ご自分の言とご自分の知恵に向かつて「我々は造ろう」と言われたのである。

[同 2.18]

⑥テオフィロス、ロゴスとソフィアの言い換え

神はご自分の内腑にご自分の「内なる言」(logos endiathetos) を有しておられ、それをご自分の知恵と共に、万物に先立って吐き出して、生み出された。・・・[中略]¹⁴この〔言〕は、神の霊、元、知恵、いと高き力として、預言者たちに降り、彼らを通して世界の創造と、その他すべてのことについて語ったのである

[同 2.10]¹⁵

だが、〔神が〕それを通して万物を造られ、〔神の〕力であり〔神の〕知恵である〔神の〕言は、万物の父である方の形相を取られ、この〔言〕が神の形相のもとに樂園に現れ、アダムと親しく語り合われた。

[同 2.22]¹⁶

⑦ユスティノス「神の言、神の知恵キリスト」(150～160年ごろ)

私は言った。友よ、もう一つ聖書からの証言をあなた方に提示しよう。万物の創造に先立つはじめに、神はご自身のうちから一つの理性的力を産み出された。それは、聖霊によって「主の栄光」(出 16 : 7) とも、「子」(詩 2 : 7) とも、「知恵」(箴 8) とも、「御使い」とも、また「主」とも「言」(詩 32 : 6, 106 : 20) とも呼ばれ、また自ら人間の姿でヌンの子ヨシュアに現れたとき「將軍」と名乗っておられる(ヨシュ 5 : 13～14)。「この力は」これらすべて〔の名前〕を有しておられる。〔この力は〕御父の意思に仕えており、御父の意思によって御父から生まれたからである。

『トリュフォンとの対話』61 小高毅訳¹⁷

¹³ 小高、前掲書、p.84.

¹⁴ 引用者による。

¹⁵ 小高、前掲書、p.84.

¹⁶ 同上。

¹⁷ 小高、前掲書、p.63.

⑧テルトゥリアヌス「神の言葉・神の知恵・御子」(213年前後)

言はまず知恵という名前で、思考するために神によって設けられた。「主は様々な手段のはじめとして私を設けられた」(箴8:22)。それから活動するために生まれた。「神が天を準備している時、私は神のかたわらにいた」(箴8:27)。

『プラクセアス反論』7:1 土岐正策訳¹⁸

このように、御子もまた、知恵という名前で、自分のほうでも神を認めている。「主は、その業のために、様々な手段のはじめとして私を設けた。あらゆる丘の前に私を生んだ」(箴8:22)。ここではたしかに知恵が、自分は主の業と道のために設けられた、と言っているように思われ、いっぽう、他の箇所ではあらゆるものが言によって造られ、言なしには何も造られなかった(ヨハ1:3)ということが示されている。もう一つ同じような章句をあげれば、「もろもろの天は主の言によって造られ、天の万軍は主の霊によって造られた」(詩33:6)一言うまでもなく言に内在する霊によって。もしそうであるなら、時には知恵という名前で、時には言という呼び名で、一つの同じ力が存在することは明らかであり、この知恵が神の業のために様々な手段のはじめを受け取り、それが天を造ったのであり、この言を通してあらゆるものが造られ、それなしには何も造られなかったのである。しかし、このことについてはこれで充分であろう。というのも、明らかに言そのものが、あるいは知恵、あるいは理性、あるいは神のあらゆる精神と霊という名前で存在しているからである。そして、この言が神の御子となったのであり、神から出てくることによって生まれたのである。[同7:3~4]¹⁹

⑧テルトゥリアヌス、ヴァレンティノス派の流出論との関係

ある人は、このような私の主張を、ある種の流出という考えを導入するものであると考えるかもしれない。すなわち、あるものから他のものが発出したと言う考えであり、それはヴァレンティノスがある一つのアイオンから別々のアイオンを引き出す時に行っていることである。そこで、私はまずあなたにこう言いたい。「異端もまたこの語を使っているが、それだからといって、真理がこの語とこの語の伝える事柄及び元来の意味を用いないというわけではない」と。むしろ、異端は自分の嘘をでっちあげるための素材を真理から手に入れたのである。・・・(中略)²⁰ヴァレンティノスは、「流出」を主張した際に)流出したものをその創造者から引き離し、切り離している。こうしてアイオンを、自分の父を知らないほど、創造者から離れたところに置いた。結局アイオンは父を知ろうとしても、知ることができない。というよりむしろ、アイオンはほとんど破壊されて、他の実体へと解消してしまっている。いっぽう、私たちの主張においては、御子だけが父を知っており、その御子が父の心の中をあらわし、父のもとですべてを聞き、

¹⁸ 土岐『テルトゥリアヌス1』p.28.

¹⁹ 前掲書、p.29.

²⁰ 引用者による。

すべてを見たのであり、父によって命じられたことを語っている。そして、自分の意思ではなく、初めからまじかにいて知っていた父の意思を遂行した。[同8:1~2]²¹

参考文献

(1) 原典（校訂テキスト）

Rousseau, A. et al, *Irénee de Lyon Contre les hérésies Livre I-V*, 10vols. Paris, Cerf, 1965-82. (Sources Chrétiennes 263-4, 293-4, 210-1, 100-*, 152-3).

(ラテン語訳校訂本文、ギリシャ語断片及び推定復元本文、仏語対訳。)

Irenäus von Lyon Gegen die Häresien I-V, Freiburg, Herder, 1993-2001. (Fontes Christiani).

(上記S Cの本文（ギリシャ語断片が現存する箇所はギリシャ語、他はラテン語）と独語の対訳。)

(2) 翻訳

小林稔訳『エイレナイオス 3/4 異端反駁 III /IV』（キリスト教教父著作集 3/1, 2）教文館、1999—2000年。

(全5巻の内3、4巻が既刊。)

小高毅編『原典 古代キリスト教思想史 1 初期キリスト教思想家』教文館、1999年。

(抜粋集)

Robert, A. & Donaldson, J. *Irenaeus. Ante-Nicene Christian Library, vols. 5, 9*. Edinburgh, T&T. Clark, 1880.

(Ante-Nicene Fathers vol, 1 に再録。)

秦剛平訳『エウセビオス 教会史 1』山本書店、1986年。

土岐正策訳『テルトゥリアヌス 1 プラクセアス反論、パトリウムについて』（キリスト教教父著作集 13）教文館、1987年。

(3) 研究書（エイレナイオス関係）

大貫隆『ロゴスとソフィア—ヨハネ福音書からグノーシスと初期教父への道』教文館、2001年。

Grant, Robert M., *Irenaeus of Lyons*. London&N.Y., Routledge, 1997.

(エイレナイオスについての簡潔な解説と「異端反駁」の英訳)

Fantino, Jacques, *La Théologie d'Irénee*. Paris, Cerf, 1994.

Sesboué, Bernard, *Tout Récapituler dans le Christ. —Christologie et sotériologie d'Irénee de Lyon*. Paris, Desclée, 2000.

²¹ 土岐、前掲書、p.31.

(4) 研究書（知恵の人格化とキリスト論）

Bonnard, P.-E. “De la Sagesse personifiée dans l’Ancien Testament à la Sagesse en personne dans le Nouveau.” in Gilbert, M. ed. *La Sagesse de L’ancien Testament*. Leuven U.P., 1990.

Murphy, R. E. “The Personification of Wisdom” in John Day et als. eds., *Wisdom in Ancient Israel*. Cambridge U.P., 1995.

Witherington, B. III. *Jesus the Sage*. T&T Clark, 1994.

Jobes, K. H. “Sophia Christology: The Way of Wisdom?”. in Packer, J. I. & Soderlund, S. K., eds., *The Way of Wisdom*. Zondervan, 2000.

Fiorenza, Elisabeth S., *Jesus: Miriam’s Child, Sophia’s Prophet*. Continuum, 1995.

金井由嗣「知恵の人格化と一人称表現—箴言 8 : 12『私＝知恵』の理解」、『日本の神学』39（2000年）所収。